

## 6. 熊本大学薬学部改善計画書

領域	改善計画 (H27. 3. 31現在)	改善状況① (H27. 12. 1現在)	改善状況② (H28. 12. 1現在)
教育	<p>(2年間で改善する計画)</p> <p>1) 入学者選抜は、平成22年度～24年度実施分(平成23年度～25年度入学選抜)については一般選抜前期日程・後期日程入試の2回を実施した。平成25年度実施分(平成26年度入学選抜)からは後期日程を廃止し、前期日程に先行する推薦Ⅱ(センター試験を課す)を新たに導入した。今後、推薦入試で入学した学生と一般入試で入学した学生の入学後の成績等を追跡調査して検証を行う。</p> <p>2) 薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂に対応し、平成27年度以降入学者を対象とする教育プログラムの構築に早急に取り組むために、3月23日に薬学部教員が52名出席(事務職員陪席)し、FD会議を開催しスモールグループディスカッションによる検討を行った。今後、平成27年度以降入学者を対象とする教育プログラムを構築する。</p>	<p>1) 推薦入試で入学した学生と一般入試で入学した学生の入学後の成績等をSOSEKI等を用いて、平成29年3月までに検証を行う予定である。</p> <p>また、高校の数学および理科(物理、化学、生物)の理解度を確かめるため、今年度からプレースメントテストを実施し、理解度の違いを見極める認識授業を1年次に行った。</p> <p>2) 薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂に対応し、平成27年度以降入学者を対象とする教育プログラムの構築に早急に取り組むために、3月23日に薬学部教員52名が出席(事務職員陪席)し、FD会議を開催しスモールグループディスカッションによる検討を行った。また、平成27年度以降入学者を対象とする教育プログラムの構築の一貫として、薬学概論Ⅰにて学外講師によるマナー講座を実施した。加えて、今年度から新たにジェネリック・スキル概論の授業を新設し、キャリアプラン・キャリアパスに対する理解を深め、また、ジェネリックスキルを客観的に評価するためPROGテストを実施し、初年次からのキャリア形成に対する意識付けを行った。</p>	<p>1) 平成26年度入学から、薬学科及び創薬・生命薬科学科の各学科に推薦入試Ⅱ(センター試験を課す)による学生を60名(毎年各学科10名づつ)受け入れた。推薦入試Ⅱと一般入試により入学した学生に入学後の授業、演習や成績等にどのような差が生じているか調査・分析するため、平成26年度入学学生を対象に、3年間の成績等を比較分析して平成29年3月までに検証結果を取りまとめる。</p> <p>2) 平成27年度入学から適用するカリキュラムを作成し、モデルカリキュラムに沿った教育プログラムを構築した。主な内容として、それぞれの学年で必要とされる教育成果が判るようにカリキュラムマップの作成を行った。また、カリキュラムマップの作成と併せて、基礎知識、応用、実践の順に授業科目を配列する必要があったために一部科目の開講時期を変更した。(薬剤学Ⅰは、3年前期から2年後期へ、分子生物学は、2年前期から1年後期へ等)</p> <p>3) 27年度までのディスカッションのプロダクトが薬学科卒業時に求められる資質(内容)を整理した。そのプロダクトを基に、1年間かけて教育委員会及び教授会で検証・精査して、平成28年3月の教授会で薬学部のカリキュラムマップの確定版を完成させた。また、創薬・生命薬科学科のカリキュラムについてもモディファイし、平成28年9月の教授会で最終版が確定した。カリキュラムについては、ホームページで公表済である。</p>
社会貢献	<p>(法人評価までに改善する計画)</p> <p>組織評価の自己評価書を作成した段階では、3センターを連携統合することを検討していたが、その後、教授懇談会で数回にわたり検討した結果、現在の3センターに加えて、DDSフロンティアセンターを新設する4センター体制の方針に変更した。4センターそれぞれの目的にマッチした相談窓口を整備する。この4センターを整備することにより、外部資金の獲得金額の増を見込んでいる。</p>	<p>DDSフロンティアセンターの設置について検討を行った結果、設置時期を来年度以降に延期することとした。</p> <p>なお、グローバル先端健康科学研究棟の建物を平成29年度概算で要求するので、センターの整備についても見直しを行う。また、現在、薬学部では薬草パーク構想のプロジェクトを展開している。(詳細は、以下の「その他：薬用資源エコフロンティアセンター」に記載)</p>	<p>平成28年10月及び11月の薬学部運営会議で薬学部の組織構想について検討を行った。3センター(附属創薬研究センター、附属薬用フロンティアセンター、附属薬用資源エコフロンティアセンター)及び生命科学研究部の天然物化学・創薬・育薬を専門研究分野との基幹5分野(遺伝子機能応用学、天然薬物学、製剤設計学、薬物治療学、薬剤学、薬剤情報分析学)を統合して、「自然共生型産業イノベーションセンター」へ改組し、基礎研究を進展させ、その研究成果をシームレスに還元するイノベーション推進体制へと平成30年度までに構築することを決定した。</p> <p>また、同センターにドラッグデリバリーシステム関連の創剤・臨床開発部門を32年度までに設置予定である。</p>
国際化	<p>(法人評価までに改善する計画)</p> <p>ニューメキシコ州立大学(UNM)薬学部との薬学教育に関する交換留学生プログラムの実施を検討する。</p>	<p>平成27年11月に、ニューメキシコ州立大学薬学部に出張し、協議を重ねて双方向性の交流プログラムを策定中である。</p> <p>平成28年3月には、ニューメキシコ大学の研究者を招いて交換留学生プログラムに関する打合せ及び講演会を開催予定である。</p>	<p>平成28年3月にニューメキシコ州立大学薬学部武田先生を招いて、本学部において特別講演を実施し、さらに教員交流や学生交流について打ち合わせを行った。また、平成28年10月には、ニューメキシコ州立大学ブレスキー教授を招いて研究者交流について打合せを行った。薬学部及び薬学教育部に関する交換留学プログラムについては、両大学で検討中である。</p>
	<p>(2年間で改善する計画)</p> <p>現在、ジョージア州立大学と大学間のMOU(交流協定)締結を検討しており、設置した海外ラボを中心とした人的支援を進める。</p> <p>平成27年4月から、SGU(スーパーグローバルユニバーシティ)の一環として創薬・生命薬科学科にグローバルエリート養成プログラムPLEASEDを発足させる。</p> <p>また、UNM薬学部との薬学教育に関する交換留学生プログラムを試験的に実施する。</p>	<p>現在、ジョージア州立大学炎症・免疫・感染研究センターと交流協定を締結しているが、大学間のMOU(交流協定)締結に向けて調整中である。</p> <p>また、ニューメキシコ大学薬学部との交換留学生プログラムについては、平成27年11月に出張して打合せを行い、平成28年度に交換留学生プログラムを試行すべく、プログラムの内容について協議を行っている。</p> <p>グローバルエリート養成プログラムコースについては、5名の学生が配属されており、TOEIC等の試験の受験を課し、早期研究室体験を実施した。</p>	<p>1) 大学間の交流協定への格上げについては、Dr. Li (Biomedical Science Center, Director)とさらに具体的な打ち合わせをしている最中である。</p> <p>2) 大学(薬学部)のグローバル化を推進し、グローバルで活躍できる創薬・生命薬学研究者を育成するため、グローバルエリート養成プログラムPLEASEDにより、平成27年度5名、平成28年度3名を選定した。このプログラムにより、1年、2年生にメンターを付けて、早期研究室体験、セミナーへの参加、薬学英語の受講、単位を取得した大学院講義は進学後に大学院の単位として認定など特別措置を受けるようにしている。</p> <p>3) 平成28年3月にニューメキシコ州立大学薬学部武田先生を招いて、本学部において特別講演を実施し、さらに教員交流や学生交流について打ち合わせを行った。また、平成28年10月には、ニューメキシコ州立大学ブレスキー教授を招いて研究者交流について打合せを行った。薬学部及び薬学教育部に関する交換留学プログラムについては、両大学で検討中である。</p>
	<p>(次の組織評価までに改善する計画)</p> <p>グローバル大学を目指すため、フィリピン大学ロスバニョス校獣医学部とのWディグリー制度の導入を検討している。</p> <p>また、UNM薬学部との薬学教育に関する交換留学生プログラムを実施する。なおUNM薬学部と部局間交流協定を締結し、同プログラムに参加学生への単位の付与を検討する。</p>	<p>ダブルディグリー制度については実現はしなかったが、10月にはフィリピン大学ロスバニョス校と大学間交流協定を締結した。今後、人獣共通感染症に関する研究にも重点を置き、学生を海外に留学させる予定である。</p> <p>なお、薬学部地区において、平成27年10月16日には「熊本慢性炎症性疾患国際シンポジウム2015(ISCIDK2015)」を開催し、平成28年1月7日には「熊本薬学・獣医学国際シンポジウム2016」、平成28年2月12日には「日本・ミャンマー国際シンポジウム2016(熊本)」を開催予定である。</p> <p>また、ニューメキシコ大学と実施予定の交換留学生試行プログラムについて、その成果や実施状況等を検証し、本格的なプログラムを実施予定である。また、単位付与についても検討予定である。</p>	<p>1) フィリピンにおける高等教育のシステムが大きく変わったためにダブルディグリー制度の導入は困難になった。しかし、平成28年9月にさくらサイエンスを活用した国際交流を実施することができ、新たな研究教育交流のあり方を模索することができた。</p> <p>2) 平成28年3月にニューメキシコ州立大学薬学部武田先生を招いて、本学部において特別講演を実施し、さらに教員交流や学生交流について打ち合わせを行った。また、平成28年10月には、ニューメキシコ州立大学ブレスキー教授を招いて研究者交流について打合せを行った。薬学部及び薬学教育部に関する交換留学プログラムについては、両大学で検討中である。</p>
その他(男女共同参画)	<p>(2年間で改善する計画)</p> <p>男女を問わずワークライフバランスの実現に向けて、本学の育児・介護支援制度の周知と利用を推進する。</p>	<p>今後も男女を問わずワークライフバランスの実現に向けて、本学の育児・介護支援制度の利用について、メール等で周知を行った。</p>	<p>男女を問わずワークライフバランスの実現に向けて、本学の育児・介護支援制度の利用について、メール等で教職員に対して周知を行った。</p>
	<p>(次の組織評価までに改善する計画)</p> <p>第3期中期目標期間終了時における女性教員の採用比率目標を17%に設定し、男女共同参画セミナー・シンポジウムの積極的な呼びかけや、諸制度(育児・介護休暇・短時間勤務等)に関する情報提供を実施することで向上させる。</p>	<p>女性教員採用比率について、目標設定に到達するよう、引き続き幅広く公募を行うとともに、全学開催の男女共同参画セミナー・シンポジウムの積極的な呼びかけ(案内チラシの配布、メールでの案内)を実施した。</p> <p>さらに、生命科学研究部(薬学系)男女共同参画推進委員会の共催で、女性研究者講演会(平成27年5月8日、主催：拠点形成研究A)、女性研究者交流会(平成27年7月17日、主催：女性研究者研究活動支援事業(拠点型))を開催した。また、平成27年8月27-29日には、薬学部地区において、女性研究者研究活動支援事業(拠点型)主催の夏季集中講義「ジェンダー入門」(28日は立教大学の教授を招いて「熊本版白熱教室」(働くこと、ジェンダーがテーマ)と題した夏季ワークショップ)が開催された。</p>	<p>1) 女性教員採用比率について、目標設定に到達するよう、引き続き幅広く公募を行うとともに、全学開催の男女共同参画セミナー・シンポジウムの積極的な呼びかけ(案内チラシの配布、メールでの案内)を実施した。12月1日現在の女性教員の比率は、11.53%になった。</p> <p>2) 7月27日に薬学部において「育児・介護支援セミナー」を開催し、男女参画委員会委員長から「就労・就学と家庭生活との両立支援」について状況について説明があり、生命科学研究部(薬学系)、薬学部及び事務職員30人が参加した。育児・介護等のライフイベント期間中の研究者には、男女を問わず、研究補助員の雇用を支援する事業や自治体が実施している病児・病後児保育を利用される場合の利用料の支援等、熊本大学独自の事業の説明について併せて説明があった。</p>

領域	改善計画（H27. 3. 31現在）	改善状況①（H27. 12. 1現在）	改善状況②（H28. 12. 1現在）
その他 （薬用資源エコフロンティアセンター）	<p>（2年間で改善する計画）</p> <p>これまで准教授であった薬用資源エコフロンティアセンター長を教授ポストとし、業務の推進力強化を図る。また、大江キャンパス薬草パーク構想を推進し、薬用資源の活用を通して地元企業との連携を強化する。併せて、ネパール、スリランカなどの未開拓な薬用資源の探索と保全を通して、研究教育の国際連携の新展開を図る。</p>	<p>現在、薬学部の最大の特色である薬草園を広報の中心に置いた「薬草パーク構想」というプロジェクトを展開し、企業、銀行、自治体等と連携し熊大基金を募り、大江キャンパス構内に散策路を設け、多くの薬用植物や希少植物等の保護・育成を行い、地域に開放することを目的としている。</p> <p>今年の7月には、薬学部に、健康食品の販売などを手がける「株式会社えがお」と「機能性食品共同研究講座」を立ち上げ、薬用植物学分野の研究・教育を推進し、機能性食品の新規開発のみならず、将来を担う国際性豊かな研究者を社会に送り出す予定である。</p> <p>9月には、熊本県合志市と薬用植物を使った研究や商品開発に関する連携協定を、10月には、宮崎県日向市と「薬草の里づくり事業」を推進する連携協定を締結した。</p> <p>また、平成26年度からスタートした文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に本学の「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成」事業が採択された。薬学部においても、COCで採択された熊葉ミュージアム構想（地域人材育成型の薬草パークの利活用と観光サテライトプロジェクト）として、11月には熊本県山都町で「第1回薬草キャラバンinみたち」を開催し、12月には南小国町で第2回薬草キャラバンを開催予定である。</p> <p>平成28年3月17日には、地域創生推進機構と連携して、地域に古くから根ざしてきた作物や有用植物の保全・普及を目的とした「熊本在来種研究会」のキックオフシンポジウム（第1回在来種フォーラム）を開催し、将来のベンチャー企業立ち上げを目指す。</p> <p>また、薬用資源エコフロンティアセンターにおいては、現在までに大学間及び部局間協定を根ざして来たネパールのポカラ大学、ミャンマーのパテイン大学、そしてカンボジアの国立保健科学大学等と未開拓な薬用資源の探索と保全を通して、研究教育の国際連携の新展開を図っていく。</p>	<p>1）「植物の力で熊本県をもっと豊かに」をテーマに、（株）えがおとの「機能性食品共同研究講座」に続き、H28年7月には河合興産（株）との「アグロメディシン開発共同研究講座」を立ち上げた。日本の在来野菜（品種）の栽培試験、成分表示、そして販売までの流通バリューチェーン研究を推進し、機能性食品の安定的供給システム開発を継続中である。さらに平成28年3月17日に開催した「くまもと在来種研究会 第1回フォーラムを開催した際のご縁で熊本県内の農業従事者との連携が始まろうとしている。こうした2つの事業を実施したことにより、当初の計画を達成した。</p> <p>2）熊本県合志市との協定に基づき、昨年度より合志市と連携した低アレルギーの在来小麦の選抜を終え、現在合志市内で数件の農家に依頼し、4反ほどの栽培面積を利用し研究開発を進めた。さらに宮崎県日向市との「薬草の里づくり事業」推進連携協定に基づき、現在日向市東郷町「牧水公園」と隣接する1ha程の試験圃場を開設した。同時に、薬草の里づくり講演会を年2回実施したことで、参加者平均200名の動員を達成した。</p> <p>3）昨年度より部局間協定を目指して準備してきたカンボジア国立医科学大学及び厚生省カンボジア伝統医療局との締結協定に合意し、締結調印に向けて2つの機関との薬用資源の探索と保全を通して、研究教育の国際連携を図っていく。平成28年2月12日に、日本・ミャンマー国際シンポジウム（大学間教育研究交流協定記念イベント）そして、同年10月2日に、文部科学省二国間共同研究成果発表の場としてJapan-Turkey International Symposium on Pharmaceutical and Biomedical Sciencesを熊本大学薬学部で2つの国際シンポジウムを開催した。同年8月22日に、ネパールのThe Asian Institute of Technology &amp; Management (AITM) では前任の准教授が集中講義を実施し、センター長による科研・基盤研究(A)の成果国際研究発表セミナーを延人数1,000名の学生らの前で開催した。</p>